
緋弾のエリアの人類欠落者

断耶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

緋弾のアリアの人類欠落者

【Nコード】

N5707V

【作者名】

断耶

【あらすじ】

あらすじ？言うことがありません
あえて言うなら酷い作品です

第一話（前書き）

どもども、断耶です

この作品は………言うことがありません！

駄作で良いじゃないか！ごめんなさい！

いや、まじめにこの作品は好き嫌いが分かれるかと

第一話

薄暗い部屋、五月蠅い音、悪化していく環境。

俺は何でこんな所にいるんだろう。いや、答えは分かっている俺が馬鹿だったから

動きたい、けど動けない。体が弱っているからではなく、体の神経が切れているから。

腕は切り落とされて、足は穴があいている、大型ドリルで貫通されたその穴は、血が固まって下が見える

お腹が空いた、なんて思わない、思えない。空腹も感じない、感じる余裕が無い。

時間が分らない、分かりたくも無い。親に売られて、研究所で実験を受けてから何年経ったかも分からない。分かりたくない。

声は出ない。枯れているなんて言えない状況、水は泥水、食べ物は何も無い。肉。

自分達を同じように実験に使われ、実験で死んでしまったモノの肉。食べたくない、なんて思っていたときは終わった。もうどれくらい前だったかは覚えてない。

ただ、生きたい。それだけの為に肉を食い、嘔吐しても、気持ち悪くなっても、体が拒絶しようと、少しだけでも食らった。

少しでも体を長引かせる為に、少しでも長く生きて、あの平和な世界に戻るために。

でも、もう無理だ。腕は無いし、足も動かない。声も出ないし、口を動かす事も難しい。

生きているのが不思議な状態。いや、ひよっとしたら既に死んでいるかもしれない。

精神は壊れているかもしれない。なんにも感じない、絶望も、希望も、恐怖も、最近では痛みもわからなくなってきた。

同じ牢にいた仲間も、もういない。俺の腹の中に消えた。最後の俺も、きつと他の誰かに食われるのだろう。

それとも、人の肉は食べたくないと言って無残に捨てられるのだろうか。

目に映るのは血で汚れた壁、耳に入るのは、少年少女、研究の為に被験体の泣き叫ぶ声。

彼等も、後何日かしたら声が出なくなってくるだろう。

「おい、起きろポンコツ」

牢が開き、そうやって腹が蹴られる。

「ああ、手足が無いんだったな。それじゃあ仕方ない、俺が連れてってやるよ」

そう言って、また腹が蹴られる。もう胃から出るものは何も無い。

「おっと、そっちじゃないぞ。こっちだ」

今度は頭が蹴られる。体の方向が変えられ、また腹が蹴られる

「ほらほら、早く行こうぜ」

蹴る。蹴る。蹴る。ただ蹴られる。

彼に連れて行くと言う意思は無い。ただあるのは、行くまでに何回ボールを蹴るか、それだけ。

ゴールは近くの研究室。手術室のような台があり、横には張り付け器具がある。

アイアンメイデンもあり、電気椅子もある。爪剥ぎ機もあり、ドリルもある。ギロチンがあり、砲台がある。

拷問の為に作られたようなその部屋、そこに蹴りこんでゴールになる。

「やっとゴールか。ボールも買い換えないとな」

そう言いつつ、やっと彼を手で持ち上げる。持ち上げ方は至って簡単、頭を持ち、ただ上げる。

そうして手術台の上に置き、肩や足を固定バンドで止める。

そして彼は研究室から出ていき、近くから少女の叫び声が聞こえ出す。

そのタイミングで入ってくるのは白衣の男性。医者のようなその格好は血が飛び散っている。

「どうした被験体154番。元気が無いな。あの威勢は何処に行っただんだ？ん？」

気味が悪いような、気色が悪いような、濁った目で見つめてくる研究者。

喉が潰れる程叫ばせた本人が良く言う……もう喉から声は出ないだろう状況なのは一目瞭然だろう。

「静かだと遣り甲斐が無いな………そうだ」

そういつて、彼は左に向かい視界の中から消える。

暫らくすると、手術台が動き、視界が無理やり変わる。

目に映るのは砲台、機械に繋がれているそれは、真っ直ぐに心臓を狙っている。

「大丈夫だ、死にはしない程度に弱めてある。弾も鉄じゃない。だから泣き叫べ」

砲身が甲高い音を鳴らし

何かが撃ち出された。

その何かを知る前に衝撃。腹が抉られているような傷みと共に感覚が傷みに絞られ、傷み以外を感じなくなる。

何度も何度も傷みを受けたこの体。その心臓辺りには丸い痣が出来ており、カランツ、と音を立てて球体が落ちる。

手のひら程度の球体、良く見ると鉄ではなくプラスチックで出来ている。

弾が鉄より軽い分、速さは上がるが、威力は劣る。しかし、全体的に見ると鉄よりも痛い分非情である。

鉄ではないから貫通しない、代わりに振動や痛みのみが伝わってくる。死ぬ事が無いのだから、コレ以上拷問使いやすい物は少ないだろう。

「……………」

「……………つまらない。もっと泣き叫べよ」

そう言つて、二発、三発、次々に撃ちこんでくる。心臓辺り、太もも、足の先

足の穴が開けられた部分、顔、首、腹、肩、傷口に容赦無く撃ちこまれる。しかし、それでも声は出ない。

体が悲鳴を上げる、意識が朦朧とするが、次の弾の衝撃で無理やり起こされる。でも、痛くは無い。いや、痛いのだろう。ただ痛みに慣れたから痛み戸認識にいていないだけ。

そんな事がどれだけ続いたのかは分からない。さっき見たときには科学者が扉から外へと出て行った。

機械は連射設定にでもなっているのか、操縦者がいなくても弾は次々と撃ち出される。

「……………」

貫通しない分、殺傷能力は低いが、その分凶悪な弾は止まる事を知らず。

体に当てられた弾の数も知らず。ただ受けるのみの時間。

何時までが苦痛で、何処からが快樂なのか、何処までが痛みで、何時からが普通なのだろうか……今ではもう分からない。

足者からベキツ、と言う音が聞こえる。きっと足の指でも折れたのだろう……それも今更な話。

いつその事、この弾が体中を貫通して殺してくれた方が楽だろう。

コレ以上の感覚は要らない。コレ以上の記憶は要らない。コレ以上の人生は

「……………何をやっているの？」

ふと、急に聞こえたその声はとても澄んでいて、少女の様に綺麗なソプラノボイス。

その声を発したのは、砲台の近くに立っている少女。

何時の間にこの部屋に入ったのだろう。何時からそこに居たのだろう少女は、緑色の目をしていた。

「……………」

「そう、声が出ないんだ」

少女の声に返そうとした覚えは無い。喋った覚えも無い。

それなのに、口すら動かしていないのにその少女は喋れない事を知った。

そいて一步、また一步、と足を進める。身につけている白いワンピースのような服は、所々に血がついていて彼女が被験体である事を証明している。

ココに居る事がバレたら怒られるだろう。ひよっとしたら殺される

かもしれない。

しかし、その少女はそんな事を考えていないのか、それとも気づいていないのか。ゆっくりと、ゆったりと足を進める。

少しずつ、少しずつだがこっちに歩いてきている少女は、もう少しで砲台から止むことなく打ち続けられている弾の軌道上に足を出すだろう。

「……………あ…あ…」

彼女が足を進める、一步、一步。

そして、彼女が射線上に足を踏み入れ 倒れる。

止むことなく撃ち出される砲弾は彼女にも当たる事を躊躇わない。

当たったのは右肩だろうか、頭だろうか。視力が落ちたのか、それとも神経に異常が出たのか、見るもの全てがブレて見える、霞んでブレて、視線が定まらない。

彼女の表情も見えない。きっと苦痛に歪めてるのだろうが見えない。

「……………これは痛いね」

「……………ああ」

痛い。久しぶりに感じるその感覚は、過敏に痛覚に訴える。

そうか、痛みってこんなに痛いんだな。ああ、脚の先が痛い、太ももが痛い、腕が痛い、手が痛い、体が痛い、頭が痛い、目が痛い、鼻が痛い。

体中が痛い。体中が痛い？いや、痛くない、痛い？痛くない？

良く分からない感覚、良く分からない感情。

「……………君は？」

声が出る。いや、声はさっきから出ていた。違う。

喋れる、話せる。動かなかったはずの足が動く。無かつたはずの腕の感覚が戻る。
良く見えなかつたはずの目が見える。体中の感覚が戻る。彼女が見える。

何故かは知らないが、理由は分かる。彼女が居るからだ。彼女が居るから体が戻る。すべてが戻る。

そんな彼女は　　暗い、澱んだ目をしていた。

「……………おい、起きろよ」

足場が不安定な機械の部屋。そこは飛行機の中。
なんで俺がこんな所に居るかと言うと

「後2時間30分……………」

……………コイツの所為なんだよな

このピンク？色の髪の毛の馬鹿、胸もないし威厳もない。

本人はスレンダーな体系だー、って言ってるけど……………ただのナイムネだな。

布団に抱き着いて幸せそうな顔をして寝てやがる彼女『遙』こそが、こんな状態になった元

身長は女性平均辺り、詳しくは知らんが高くも無く低くも無く。顔は美形と言うより……可愛い系と言うらしい、別にどっちでもいい気もするが。

服装は奇抜で、ヘソ出しルックにショートパンツ……変態に見えない事もない。

さて、只今7時30分。学校の始業時間は8時50分……。

「よし、学校遅刻な」

「ちょ！？ まだ転校してないのに！」

「残念ながら転校手続きは既に済ませた」

そう、今日から俺と遥は新しい学校で学ぶこととなった。

東京武装探偵高校。正確な名前だと長いので東京武偵高校。

校門の方には短い方で書かれていた事から、出来て新しい学校だと思う。武装探偵なんて、そのまま書くのは古い時代だからな。

2000×500メートルの長方形型人工浮島に作られているその学校は、そこまで珍しいものではないだろう事もない。

簡単に言うと、珍しい。場所はレインボーブリッジの近くと、交通に不便は無いだろうし、食料なども不足しない。

付近の環境は綺麗で施設も多く、水族館や動物園、アミューズメントパークを始めゲームセンターも建物がある。

コンビニも多く、スーパーもあり食料は豊富、レストラン等も作られており困ったときはお勧めだとか。

そんな最適空間の近くにある学校。それだけでも凄いのに施設が充実しているとか。

外部通信もありネットも出来る。電力も発電所があるらしいから問題無い。

そして何より、人工浮島の殆どを学校が占めている事だ。

広さもあり、周りにも恵まれ、場所にも恵まれている。これ以上に便利な所は少ないだろう。

今日から東京武偵高の生徒になる筈だった俺等は今空の上。
入学と同じに転校する予定だったので、学校には連絡が行っている
状態の今……完全なる遅刻だな。

「何で！」

「おまえの遅刻で入学式の日から五日も遅れた所為じゃボケ！」

「酷い！？ ボケだなんて言わないでよ！ ただちよつと マ
フィアを壊滅させてきただけなのに！」

「何で、当日に、マフィア壊滅なんて、面倒な、仕事を、請け負っ
たんですか？ ああ？」

しかも、予定期間を見たら2週間は掛かるって書いてあったし……
…。時間が無くて最終的に殲滅に変わってたが。

「え、いや、その……」

「ん？ 軽く言ってみな？」

「お、怒らない？」

「ああ、怒らない」

「そ、そつか。えつとね実は」

「よし飛べ」

「ちよ！？ この高度は洒落にならあああああああ！？」

「はいはい。そんな事言ってる暇があるなら学校に向かおうな」

まあ、この高度からのスカイダイビングは……確かに体に悪いか
もしれないが大丈夫だ。死にはしない。
そして一言言わせる

「学校は逆方向だボケ」

流石に距離がある今言っても聞こえないだろうから……俺も落ちる

か。

何で落ちる方向が逆になるんだよ、この風向きから普通は真っ直ぐに行けるのに……。

「よし、んじゃ後は戻ってて」

「了解。素晴らしい観光を」

飛行機の運転手からの連絡がインカムから聞こえるが、それを無視しインカムを壁にかける。

そして、出来る限り遙に近づく様に、しかし学校から離れない様に狙って落ちる。

つてか、日本の生活が遥の世話から始まるとか……

「……………マジメント」

第一話（後書き）

．．．．．言うことがありません！
あえて言うならごめんなさい！

第二話（前書き）

主人公の名前が始めて出ます

そして能力を使ったり・・・しよぼいけど

第二話

「…………… ちょっと高すぎたかな」

「ちょっとじゃないよね!? 凄い高いよ!」

「…………… まあ、この程度なら何とか」

「なるのは『揚羽』だけだつてば!」

「いやいや、遙も頑張れば出来るつて」

「無理無理無理無理! 絶ツツツツ対、無理!」

「普通そこまで否定するか?」

「こんな高さから落ちて大丈夫な人なんて居ないから!」

「暗に俺は人間じゃないと言いたいんだな?」

上空5000フィートからの降下。

つまり俺こと揚羽は落ちている。ついでに言うと、その隣で遙も落ちている。

この程度なら大丈夫なのに人を人外扱いしやがって……………俺だって人間なはずだつてのに

第一さ 背中にパラシュートあるんだから大丈夫だつて。多分忘れてるけど。

そんなこんなで上空2000フィート。流石にこれ以上は危ない状態になるだろう。

「遙。背中にパラシュート」

「神様仏様 え?パラシュート?」

「飛行機に乗るときに背負ったバック型のパラシュート」

「え、あ……………ああ! そうだったそうだった……………どうやって使うの?」

「……………紐を引っ張るだけだと思うけど」

「えっと……………ああ、きつとコレだ」

そういつて紐を引つ張つた遥はパラシュートを綺麗に開き、無事着地　　なんて事は無く。

「あああああああああああああ！？」

「どうやったらパラシュートが外れるんだよ！」

落ちるスピードは変わらないけど……それが余計に不味い。

パラシュートは軽いから頭上の何処かでゆっくりと落ちているだろうけど、遥の速さは変わらない。

とおりあえず、落ち着かせる為に近付いて俺のパラシュートが無事な事を見せておく。

これで手を繋ぐ事でパラシュートと繋がっているという思い込みで少しは安心する子がいたりする。

ちなみに、遥は安心する子に入る存在だ。

「さて、一つのパラシュートで二人は無理だよな？」

「うんうんうんうんうん！……でも見捨てないでね？」

「お前の中の俺が詳しく聞きたい。安心しろ、大丈夫だ」

「そ、そうなんだ……でも、パラシュートは一人用じゃ　　」

「俺が落ちるから」

「……え？」

驚いている間にバック型のパラシュートを取り外し、遥に付け替える。

そして素早く紐を引き。間違えても取れない様にホックを止めて強く押す。

「んじゃ、後よろしくー」

「え、ええええええええ！？」

押し力で離れたパラシュートが開き、遙が視界から消える。パラシュートを持っていない揚羽の速さは相変わらせず変わらないが、これで最大の危機は乗り越えた筈。

「とりあえず……あそこだな」

着地するのに最も適した場所を探し、落下地点から少し離れた所に大きなデパートを見つけた。

デパートの屋上には大きなバルーンが取りつけられている。あれに落ちればなんとか助かるだろう。

いざとなったら頑張って着地……は痛そうだから、他にも安全作を考え実行に移す。

コートの内ポケットから先端に小型ナイフが付いたワイヤーを四つ取りだし、自分を中心に×を描く様に配置する。

(しかし、この速さで良くと……さすがに死ぬな。)

このままだとバルーンに穴を開けて落ちる事になるだろう速さで落ちている今、事前に安全策を準備していた事に安堵する。

「ざつと1000か。……500で始めるか」

目測1000メートル。行動開始は目測で50と感じる地点からと決め、体を閉じて速さを上げる。

横からの風が強くなってきた為、このまま落ちれば道路の真ん中に落ちてしまう。

それは流石に方法が思いつかないので、そうならない為にも速さを上げ、時間を早める。

900

800

700

600

500。

「今、だつ！」

目測約500メートル。コレ以上近付くと危険であり、コレ以上離れるとそれもまた危険な距離。

後ろに伸ばしていたワイヤーを思いっきり引っ張り、少しの浮遊感と安定感の喪失を感じると共に速さが、ガクンツ、と落ちる。

パラシュートに設置しておいて良かった……遥は知らんけど。

アイツはワイヤーの事を知らないから慌ててるかもしれないけど……

……まあ、問題ない

それよりも、問題なのはここから。落下速度は落ちたが、それでもゼロではない。

安全圏とは言え、流石に落ちたら死にはしなくても暫らく安静にしていると思われよう。

それだと困る。非常に困る。まあ、つまりだ。俺は怪我一つ無い状態で学校まで行かないといけない。だからこんな所で怪我をしてられない。

「……初起動から実践とか大丈夫だと良いな」

そう言いつつ、コートのポケットから、四方に飛ばしてあるワイヤーの本体となつている四角い装置を取り出す。

最初に使ったのはただのワイヤーな為、巻き戻しは手動だったが、今回使うワイヤーは自動型。

造ったのはつい最近、と言うか飛行機内で完成させたそれは勿論初めての起動。

キーホルダーサイズの四角い装置を左右に二つずつ、ワイヤーの邪魔にならないように持ち、体の後ろに引っ張る。

そして、建物まで約50メートルとなった瞬間、手を大きく閉じてワイヤーを振る。

左右で四つのワイヤーは、見事綺麗に動き、先端のナイフ四つを建物の壁に付き立てた。

固定は十分とはいいがたいが、一人程度なら軽く支えられる程度には突き刺さっている。

そして、壁に刺さったのを確認した瞬間、手から装置に電気を流す装置が電気を基に起動。ワイヤーを素早く、しかし力強く巻き取る。巻き取られて行くワイヤーはアンカーとして揚羽の落下を止め、そのまま上に持ち上げて行く。

「…………改良の余地あり、だな」

衝撃で左手が痛い、ワイヤーを繋いである装置が小さいが為に持つのがキツイ。

いつその事バント型にしてしまった方が楽だろうか？等と考えている内にデパートの屋上に辿り着く。

そこには小さな遊び場が広がり、自動販売機が

「……………あり？」

自動販売機の向こう側少し上。何かがこちらに向かって滑空してきている。

大きさからして……………きっと遙かだろう。

「パラシュートはまだ健全だな……………」

見た感じだと綺麗に滑空している遙。どんどんこちらに近付いて…………

…………近付いて…………

「ああああげえええひゃあああ!？」
「せめてちゃんと呼べよ……はいはい」

近付いて目が見える距離になるとなんとなく分かった
アイツ止まり方知らねえや

どんだん近付いてはいるが……ここに降りるには高度が高い。この
ままだと一つ隣にあるマンションの壁に激突。

どう考えても操作方法を知らないな……感覚で操作したんだろう。
そして目が訴えている『助けてくれ』と。仕方ない　ワイヤー
だけ引っ掛けてやろう。

「ほいっと」

「え、ちょ、それだけなのおおお!？」

そんな台詞を吐きながら、遥視界から消えた。

それから十秒ほど待ってから、ワイヤーを自動販売機に固定する。

そして右手でワイヤーを掴み、一気に持ち上げる!

細いワイヤーではないが、強く引っ張ると手に食い込む。

遥とパラシュートの重さが加わっているのだから、当然だろうその
重さ。

揚羽が引っ張ったそのワイヤーは切れることなく、遥とパラシュー
トを空高く持ち上げた。

「うにゃあああああ!？」

「……やりすぎたか？」

空から落ちてくる遥とパラシュート。

正直パラシュートは捨てたいが、遥が繋がっている以上無理な話。

別にそれでも良いのだが……それだと持ち上げた理由が無くなる為、
遥を拾ってパラシュートが落ちる下から急いで退く。

「さて、流石にこのままだと遅刻だから急ぐぞ」

「私に対する誤りは無いのかな!？」

「ほらほら、置いてくぞ」

「あ、ちよっと待ってよー」

とりあえず……………学校の場所を聞こうじゃないか。

そう思いながら揚羽は階段を降りる。

「揚羽、学校で何処なの？」

「うん、それがわからなくなったのはお前の所為だからな」

「……………え？」

「お前がパラシユートをちゃんと操作していれば、二人とも学校に着地していた予定だったんだけどな」

「え、あ、その……………ごめんなさい」

「まあ、そんな事したら打ち落とされるけど」

「じゃあ駄目じゃん!どっちにしる駄目なんじゃん!」

屋上から室内に入ってエレベーターに乗る。1階を押し、携帯を開いて現在位置を確認する。

学校から北に200ほど言った所だな……………これならすぐに着くだろう。

始業式は遅刻だが……………遥の所為にしよう。間違っでは無いし。

第三話（前書き）

なんとなく出来たので投稿なり

第三話

「んで、この運の悪さは誰の所為だ？」

「多分揚羽だと思うよ……」

「よし、とりあえず遙の所為な」

「今の会話の意味は何!？」

立ち止まって話している二人、話していたら止まった、と言うより自ら止まったという感じ。

その理由は、彼等の目前を走った自転車が原因であった。

「きつとあれだ。日本の武偵は自転車に爆弾を仕込むんだ」

さっき走り去った自転車。乗っていたのは武偵服を着ていたことから武偵と判断できる。

そして、その武偵の乗っている自転車のサドル下には爆弾らしきものが付けられていた。

「そんな必要性は無いよ……」

「いや、でもアイツ焦ってなかったし、必死の顔ではあったけど……」

「…多分学校だろうし」

「………確かに、普通に走ってたね」

「だろ? やっぱり日本では普通なんだって」

「そうなの……かも」

「ほれほれ。コレ以上の遅れは不味いだろ」

「うん、そうだね」

そう言って学校方面に歩き出す二人。

自転車が学校から離れた方向へと向かって言った事に気づいたのは、揚羽一人であった。

「まあ、あれ位で死ぬんだったら1年持たないしな」

「揚羽、学校つてアレかな？」

「ん？ああ、そうそう。あれが武偵高」

「浮いてるんだ………酔わないかな」

「お前は車以外には酔わないんだし………さて、急ぐか」

「ちょ、ちゃんと答えてよ！」

「先に言うが、酔った所で学校は変えられないからな」

「やっぱり酔うと思ってるじゃん！」

「本日よりこの武偵高に転校してきました、遥です。ファーストネームはありませんが、どうぞよろしく」

「ついでの揚羽です。同じくファーストネームはありません。適当によるしく」

「それじゃあ、二人はあそこに座ってもらいましょう」

担任に教室まで案内され、簡単に自己紹介を終えたのだが……ク
ラスの意識は二人に向いていない。
指差された窓際の奥の席まで歩きながら周りを確認すると。
誰もが、ちらちら、とクラスの後ろにある席を見ている。

「……………あ」

「どうしたの揚羽？」

「いや、あれって自転車の……………」

「……………ああ、本当だ」

その席に座っているのは、朝の自転車に乗っていた青年と
ピンク色の髪をした少女。 ピ

「……………カドラと中が良いようだな」

「……………だね。どうしようか」

「特に何もしなくて良いだろ。まだコンタクトは無さそうだし」

「分かった。それじゃあ私は」

「星伽を捜せ。捜して殺す」

「でも……………」

「……………でもじゃねえ。絶対殺す」

物騒な話。しかしそれは、左右に置かれている机に座っている人に
も聞こえない程度の言葉。

だから、それ以上小さくした呟き その後の言葉は他の誰にも、
遙にさえ聞こえなかった。

「遙をこんな目に合わせた星伽が幸せとか、超ウザイ」

「……君は？」

「私？私は……人形、かな」

「嘘……人形は喋らない」

「うん、そうだね。でも……この人からしたら、人形」

彼女はそう言つて、凄く寂しそうな、凄く悲しそうな、はたまた無感情にも見える目で俺を見つめる

そして、俯き、何かを考えるように顎に手をあてる

これは夢。何人もの大人が忘れろと言つた光景。

分かつてる。夢だと分かつてるのに抜け出せない。

違う。夢だと分かつているからこそ、抜け出せない。

この光景こそ俺達の源。この光景があるから今の俺達がいる。

不意に、彼女が顔を上げ、こちらを見る。その時の顔は 無表情だった。

「貴方は選ばれた。だから、貴方は人形の駒になる」

「人形の駒？」

「ええ、だから貴方は生かされた。異化されて生かされた。貴方はもう人の枠からはみ出た存在」

「人の枠から……はみ出た？」

「大丈夫。不安を感じる必要は無いわ。だって
精神は壊すんだもの」

そう言っつて、彼女の手が俺の頭に触れ

不意に、何故かは分からないが、不意に目が覚めた。
顔を少し上げると、まぶしい光が目を焼く感覚に襲われる。
閃光手榴弾よりも強いんじゃないか、などと考えている間に目が慣
れると、視界の前には遙が立っていた。

「……………眠い」

「それは授業を寝た後に言う台詞じゃないと思うけど」

「良いんだって……………おやすめ」

「みじゃないの!?!」

「いいから休んでろっつて」

「そんなことより」

依頼が来たよ」

「どのタイプだ?」

「ケース」

「よし、場所は?」

「仙台にある工場だね」

「遠いな。人数は？」

「確認できていただけでも15は下らないだろうね」

「多いな……足は？」

「一応、バイクがあるけど……無改造だから微妙、速くないし硬くも無い。武器は何も無い只のバイク」

「足りない用意しろよ……武器は？」

「一応全部あるけど、マガジンが少ないかな。ガジェットのマガジンはある？」

「予備込みで20個あるから問題無い。アクセサリは全部？」

「追加マガジンが無いからちよつと大変かな。あとはサプレッサーが壊れたから買いなおしたらいいんだけど、大きさが一回り小さくなってる」

「小型化は良いけどやり過ぎも邪魔にしかないよな。時間は？」

「今すぐにも。取り逃がしたのが2時間前で、犯人の逃亡方法は船。工場のすぐ横を川が流れていて、船を上流500メートルに確認したのが2分前」

「……いや、それ もう直ぐじゃん」

「だから言ったじゃん。周りの目を考えて新たに武偵に依頼したらしいから、それよりも先にしかも見つかる事無く行動して欲しいって」

「無茶苦茶だな……せめて弾薬位は用意してくれても良いのに」

「仕方ないよ、武器は禁止制限ギリギリ、しかも弾はグレーを越えて黒だもん。学校で輸入したら見た目の問題だし」

「そうだけどさあ……なら特務武偵なんか呼ぶなよな」

「まあ、そうなんだけどね……」

はあく、と長いため息を吐いて椅子から立ち上がる。

新たな武偵が強襲をかける前、出来る事なら武偵が来たときには全てが終わっているのが望ましいだろうな。

外国だったら許された事を、何で自ら呼んだ国が禁止するんだよ…

…逆にばれない様に支援するのが普通だろうが。
その上で武器の運搬は他の荷物と一緒に運ぶって……………。
武器の運搬をする人を運送業者扱いしてるのか。それとも運送業者を武器運びに使ってるのかどっちにしる良い事では無いだろうな。

「バイクは少し離れた所に用意してあるから、そこで武器を受け取るわ」

「運送業者が止まってくれれば良いんだけどな」

「まあ、そうじゃなかったら手持ちの武器でやらないと」

そう言っただけスカートを少し上げ、太ももに付けているホルダーと、そこに収まっている苦無を見せる

そして、遙が腕を振ると左右袖口からバタフライナイフが現れる。

このバタフライナイフはドイツの名工が作り上げた名品。

遙の意見を取り入れて作られて二つのバタフライナイフは、右手は片刃で硬く頑丈に、左手は両刃で鋭く作られている。

二つとも刀身の下にワイヤーが取り付けられており、袖の中に隠して付けられているバンドと繋がっている。

普通の武偵としては多過ぎる武器の量だ。

「……………単パンって熱くないの？」

「……………」
「さて、それじゃあお仕事頑張りますか」

真っ赤になっていた遙を置いて教室を出る。

いや、単パン位で真っ赤になるなよ。というか、パンツが見えない様に単パン履いてるんだからさ……………。

「……………あ、着た」

「マジで着たよ……………もう飼い犬だな」

「本人達の前で言っちゃ駄目だよ？」

「つまり遙も思ってるんだな」

「……………あ、こっちです」

揚羽の声が聞こえなかったかのようにトラックに向かって手を振る遙。

まさか、本当にここで止まるとは思わなかった。正直手持ちで何とかする方法を考え出していたタイミング。

変なマークのキャラクターを付けて走るトラックに武器が詰まれているなんて、誰も思わないだろう。

「えっと……………あ、あそこの黒いカバン四つと……………向こうのシルバーケースを取ってください。それと向こうのバックと」

遙の指示により次々と武器が降るされる……………正直何に何が入っているかは全然憶えてない。

憶えているのは黒いカバン四つだけ。制圧用に手を回して一番使いやすいかった2種類を持ってきている。

「……………遙」

「後、あのカバンと　ん、どうかした？」
「……この量はバイクに入らないだろ」
「……………あ、これ戻してください」
「最高6個だと思うけどな」
「すみません、この6つ以外全部お願いします」

凄く困ったような面倒なような顔をしながらも仕事に忠実な運搬業者は黙々とカバンを元の場所に戻して行くが、それを見ている暇は無い。

あの会話から約15分経過。当然新しい武偵に依頼が出されているだろうし、ひよつとしたら捕まえているかもしれない。
カバンをバイクに付けながらも考える。

会った時点で武偵が殺される可能性の方が高いが、それだと報酬が減るだろう。

依頼は武偵に見つからず、武偵が見つける前に倒せ…………正直教える時間と新しい依頼を出す時間が近いから無理な話だ。
そこを付けば割増出来るだろうが…………出来る限りは成功が良い。
カバンを全て付け、固定を確認する。

「さて、時間が無いな」
「うん。場所はわかる？」
「全然だな」
「…………教えるからゆっくりでね？」
「だが断る」
「え、ちよ、最初からタイヤがスリップして　あああああああ
あ！？」

スロットルを命一杯回して最初からアクセル前回。
ガソリン代を考えない行動だが、払うのは武偵高なので問題無い。
寧ろ、この程度のバイクなら破壊するのがセオリーだ。

タイヤ跡や目撃情報を混乱させるには破壊するのが手っ取り早いのに……。何故、出来る限り回収を望むのだろうか？

そんなに金が無い学校なのか？それなら近くの学校に転校した方が良い気がする……。でも、学校の備品は良いものばかりだったし、防犯ガラスもより強固にされていた。

素晴らしい生徒、もしくは職員がいるんだろう……。引き込みたいな。それが生徒だったら尚良し、そして犯罪者を恨んでいたらより良し、その理由が良ければ是非欲しい……。

「そこ右に600」

「……………そういや、敵の装備は？」

「えっと……………ギャングの武装派だったらしいから、大体はマシンガンだと思うよ」

「偶にグレネードがあったりしてな……………」

「前はスナイパーがいたね……………」

「……………ライフルは？」

「弾は少ないけど……………次左に800」

曲るとそこは倉庫が立ち並ぶ工場。

煙が出てない事と周りを様子から、使われなくなって暫らく経っている事が覗える。

隠れるには絶好の場所だが、その分移動する可能性が低い。この中に立てこもっているのだろうか。

「まあ、無くなったら適当に……………いつその事突っ込むか」

「一応私の分も持ってきてるしね」

「よし……………ライフルは背負ってるか」

「出来ない事は無いけど……………遅くなるよ？」

「じゃあ強襲じゃなくて……………時間が無いな」

「やっぱりライフルは止めよう……………この中だろうね」

「だろうな……」

バイクを止め、ペダルを立ててカバンを開ける。

右に付いている二つは揚羽の装備P90。サイレンサーで音を消し、補助パーツでサイレンサーの揺れを射程を伸ばす。

補助マガジンにより弾数を伸ばし、レーザーサイトにより命中率を上げる。それを二つくみ上げ、左右両手で打つのが揚羽の特攻。

P90の反動はあまり強くないので出来る芸当。その代わりに弾が特殊な為、拾って使う事は出来ない。

左の二つは遥の装備。試作として作られ使われる事に無かったG1
1。

3点バーストが付いている上に、ジャムら無いように自動エジェクタが付いている。

これも特殊弾だが、マガジンを増設して弾数を3倍、重さも増えたがそれ以上の便利性。

寧ろ重くなった分撃った時の反動が楽になった。エジェクトした弾が下に落ちて注意して歩かないといけないが、足を滑らせる様に歩く事で解決。

代わりに、段差があるとつまずく為にやはり注意が必要な弱点がある。

レーザーサイトを細くし、狙いを細かくしているが、フルオートだと外れる為3点バースト時しか使えない。

こちらも両手で二丁状態。これが二人で特攻する場合の装備。

「よし、んじゃ突撃しますか」

「ライフルがない事を祈るしかないよね」

「遠距離武器がな……ガジェットが微妙に遠距離だが」

「電磁砲が出来たら良いのに……元々その為に作ったんでしょ？」

「いや、まあ他の理由もあるが……まさか電力が足りないなんて思わなかった」

世間話。戦場には似つかわしくない話したが、二人の腕は絶え間無く動き、銃器を組み立てる。

そして、一旦カバンの上に置いて装備の確認をする。

「ナイフよし、ガジェットよし、マガジンよし。P90の弾数よし、各部接続パーツよし。サプレッサーによる弾道変更確認　よし」

揚羽が武偵服の裏ポケットから

右手にP90を持ち、遠くにある倉庫に単発で撃つ。

カキンツ、と薬莢が落ちる音と共に小さくコイルが跳ねたような発射音がする。

1秒以内に倉庫の壁に穴が開く。目測の位置との差を計測、大体で掴む。

マガジンを抜き取り、予備弾丸をカバンから取り出し詰める。

「苦無よし、ナイフよし、ワイヤーに損傷無し。G11のエジエクトよし、弾数よし。」

遙が太もものベルトから苦無を抜き、仕舞う。そして、腕を振りナイフを取り出す。

そして、両手のナイフを投げ、落ちる前にワイヤーで取り寄せる。

左手のナイフでワイヤーを切りつけ、切れない事を確認。

右手にG11を持ち、地面に向けて一発、撃ち先には興味もくれず、G11の下から出る薬莢の動きの速さを確認。弾倉に一つ詰めこむ。

「ガジェットのリロード完了。弾数は……使っていないから問題無し。ガジェットのマガジンを確認、完了。準備よし」

揚羽が腰から異様な拳銃　ガジェットを取りだしリロード。銃口が小さく、銃身が長い。普通なら銃口を大きく大威力に、銃身を小さく持ち運びを便利に進化していく拳銃の理論から外れた存在。普通に1.5倍程の銃身があるそれを、揚羽が取りまわす姿には重さを感じない。

「こつちも終わったよ」

遙も装備確認が終わり、二人は両手に銃器を掴み、工場に歩いて行く。走るのでもなく、隠れながらも無く、堂々と真正面からの突撃、いな侵攻。

「気づくのにとれくらいだと思う？」

「開いての気分で変わるからな……今直ぐ？」

遙の問いに揚羽が答えたと同じに、二人は左右に展開する。

それと同じに、二人がいた場所に火花が散る。それは一つではなく数多の銃弾。

その銃弾は止まらずに二つに分かれ、二人を追う。

コレだけ撃たれながらも二人は撃ち返さずに避ける。

ただ避ける。

避けて、避けて、避ける。

そうしながらも工場に近付いて、揚羽は近くにあるパイプ官の影に隠れ、遙は脇道に隠れる。

「さて、それじゃあ攻撃しますか」

第四話

「さて、それじゃ即効で終わらせますか」

揚羽がそう呟き、遙と目を合わせる。

マブタの不規則な瞬き。ウインキングと呼ばれるマバタキ信号で夕イミングを計る。

そして、一瞬だけ。ほんの一瞬、相手が打ち終わりマガジンを変え
る人が多く銃弾の数が少し減る瞬間。

その瞬間に、二人が遮蔽物から離れ、両手による乱射を開始する。

これにより倒れる人は少ないだろうが、大抵の人は避ける為に隠れ
るだろう。

そうする事で相手の弾幕が減り、尚且つ命中精度も落ちる。

この機会を見逃さず、二人は一気に工場へと駆け抜ける。

しかし、見る限り工場の入り口には嚴重に鍵が締められており、銃
のような一点集中では壊せない事は無くても難しいのが見て取れる。

「 遙！」

「了解！」

揚羽の声に答えた遙は左手を振り、出てきたナイフを掴むことなく
そのまま飛ばす。

カコンツ、と聞こえそうなほど綺麗に鍵の部分に刺さったナイフ。

しかし、それでも唯の投げたナイフ。鍵の部分に刺さりはしても壊
すまでにはいかない。

後二度ほど繰り返し返せば壊せない事は無いだろうが、生憎弾の消費を
考えるとそんな時間は無い。

だから、だから後は揚羽の出番。

「いつせーのーでっ！」

入り口との距離を目測で調べ、タイミング良くジャンプ、そのまま遥の投げたナイフの柄にドロップキック。

ガシャンッ、と金属が落ちた音と共に、揚羽の掛けた体重で開く扉。遥が素早く動き、扉をくぐる。見当たる範囲の敵を全て打ち終わる頃に揚羽が無事着地。

揚羽が二つの銃口の間を90度開き、右と前に標準を合わせ確認。遥も90度を開き、左と後ろに標準を合わせ確認。遥がナイフを収納。

両者異常が無い事を確認し、遥を前に、揚羽を後ろに進む。揚羽の弾幕を背に遥が敵を撃つ。撃ち漏らしを揚羽が撃つ。

突如、道の前に一人の男性が立ちはだかる。彼の肩には黒い筒が両手で固定されていた

「ロケットランチャー!?」

「そんなの聞いてないぞっ！」

そう驚きながらも、二人の行動は速かった。

遥が右に飛び、揚羽と男性との直線状から避ける。

それと同じに揚羽がP90を手放し、武偵服の裏ポケットからワイヤーに繋がっているナイフを三つ投げる。

三つのナイフはそれぞれが別の軌跡を描き、一つがロケットランチャーの砲身、一つがレバー、一つが男性の腕へと引っかかる。

それを確認した揚羽が機会に電気を流し、ワイヤーを巻き取る事で男性の腕を切断、そのままロケットランチャーを手元に引き寄せる。男性の絶叫が響く中、横に飛んで膝立ちの遥が発砲。その弾が男性の心臓を貫く。

「……やっぱり情報網が必要だな」
「うん、流石にこれは不味いね」
「この感じだと……狙撃も居るだろうな」
「確率が高いね……情報が間違っていると思う」
「だろうな。これでケースとか無いだろ」
「武器の種類が豊富過ぎる。どこから輸入したにしても、お金の問題になるし……」
「ぜってー支援を受けてるじゃん」
「だとすると……何処かの下請けだろうね」
「本丸に聞けば良いさ……」
「うえっ、拷問は苦手分野だよ……」
「俺も得意じゃないけどな……」
「得意じゃない人は躊躇い無く腕を打ち落とさないと思うよ……」
「そんな事を言ったら武偵は人を殺さないだろ……」
個々に来るまでに殺した人は約8名。
本来、武偵は如何なる状況においても、その武偵活動中に人を殺害してはならない。
これは武偵法9条に掲載されており、殺した場合は即退学となる所の問題ではない。
しかし、世の中には殺さないといけない存在も居る。そんな奴等の為に、日本では公安0課等の殺しを許諾されている者もいる。
特務武偵とは、その武偵活動中に、バレなければ殺害も良しとされる武偵である。
殺しのライセンスを持てるのは高校卒業後、しかし人数が少ない今、そんな事を言っている暇はない。
だからこそ、本人の希望があり、腕が秀でている場合のみ認められる殺しのライセンスを持つ武偵、それが特務武偵だ。
代わりに、学校等で処理しきれなくなつた依頼は殺害許可になり、

こちらに回される。

特務武偵は国家に縛られない。国を選ばず、その依頼による損失は自己判断の結果とされ、国に被害は出ない。

要するに、何処の国もが使える傭兵。被害を被ることなく使える便利な道具、それが特務武偵だ。

失敗して世間に広まる事を畏れ、特務武偵の依頼を手伝う事はあれど。

依頼後、国を去った後の事は無関係となる。それが例え、その国の依頼による2次災害だとしても、だ。

「とりあえず、本丸を殺すぞ。そろそろ武偵に会いそうだから気をつけるよ?」

「揚羽、それフラグ……」

「気にしなければ問題無い……殺したら不味いかな?」

「不味いに決まってるよ……」

戦場とは思えない軽い会話。命が狙われる場所では不似合いだが、彼等にはコレが日常。

この状態こそが彼等の日常で、彼等が彼等でいられる時間。

しかし、そんな状態を長く続ける事が不可能なのは彼等も承知のこと、だから彼等は進む。

廊下を曲り、階段を上り、人を殺す。何気ない動作で人を殺す。

一人、二人、三人。敵の人数は少しずつ、しかし割合としては大幅に減ってゆく。

15人いた敵も、残り4人。

本丸。主要ターゲットはまだ出てきていない。

おそらくターゲットと、その部下三人で終わりだろう。

「ロケットランチャーが出てきたんだ。もう隠し玉は無いだろ」

「逆にロケットランチャーが出てきたから何が出てきても可笑しく

ない、とも言えるけどね……」

「遙、それこそフラグだろ……」

「武偵が出るか、隠し玉が出るか……」

「まず両方出ない事を祈ろうぜ……」

1階2階が確認完了、3階建ての工場なので残り僅か。

そろから見た感じだと、3階はブリーフィングルーム、社長室等のビジネス関係。隠れる所は多そうだが、広い所は少ないだろう。

階段を上がると予想外の扉。しかし、タイミングが良いので突撃前に弾数確認等の調整する。

「さて、弾数は？」

「んー、残りあとちよいだね。予備も使っちゃった」

「まあそれは同じだな。ばら撒く分消費が早くて残り……マガジン一つ分あれば良い方だ」

「それじゃ、突撃で殲滅だよな」

「もち。多分扉の向こうは廊下。右側は俺、左側の部屋は遙な」

「弾が無くなったら少し遅くなるかも」

「苦無があるだろ」

「コレを使うのはちょっと……補給が大変なんだよ？」

「知らん。ってか、そんな事言ったら何時使うんだよ」

「ピンチになったら」

「ピンチ脱出用に何で8個もいるんだよ……」

「安全確認は幾らあっても足りないよ」

「まあ良い。んじゃ3で行くぞ」

1 2 3ッ！

数えると同じに揚羽が扉を蹴りつける。

ドカンッ、と呆気なく壊れ中に飛んで行く扉を前に、遙がしゃがんで射撃姿勢。揚羽が立っての射撃姿勢をする。

射撃が無い事で一応安全な事が分かった二人が一步踏み出そうとしたとき、ようやく扉が落ちて中が見える。

「……嘘だろ」

「……フラグ回収だよね」

中は廊下で多くの部屋がある。なんて事は無く、広い空間。ただ広い空間。障害物は柱が9つ。そんな中、敵四人がこちらに銃口を向けている。

黒人でAK47、そして一人の胸には独特なバッチ　イラク軍か。

「一体どんな奴が来るのかと思つたら、ただの餓鬼じゃねえ力」

「タイチヨ。コイツのセで皆死んだ」

「こいつら、クロス」

「でもコイツラ強い、売テ金にすル」

「……分かるように日本語説明をわざわざどうも」

「ちよつと間違つてたり変なところもあるけど……うん、分かったから安心してね」

沈黙。

敵　イラク軍が喋る事は無い。向けられるは変なものを見る目。それもそうだ、敵四人から銃を突き付けられて余裕の態度。銃を手放す事も無く、降参のポーズを取るでもなく。銃を突き付けるでもなく　　ただ立っているだけ。

両腕をぶらんと垂らし、銃を離さない二人。攻撃姿勢でもなく、反撃姿勢でもなく、降参姿勢でもなく、防御姿勢でもない。そんな状況でも言葉。

「……おまえ等、バカニしてるのか？」

「お前が……名前知らねえや」

「聞いてない揚羽が悪い……つて言いたい所だけど、今回は知らされてないからね」

「んじゃあれだ。おまえ等が武偵を殺した奴等か？」

「……お前ら武偵力？」

「そんなことはどつちでも良いじゃねえか。殺したか？殺してないか？」

「……………殺しタ、だガそれが何ダと」

隊長格が全てを言いきる前に二人は動く。

揚羽が両手のP90を乱射。撃ちながら横に払う。

遙がG11を掃射。敵の位置を大体で狙い撃つ。

二人の急な行動に付いて行けたのは二人。ついて行けなかったのは三人。

結果二人は柱に隠れ、三人は生き絶えた。

「武偵は人を殺して八いけないんじゃないのか！」

「俺等は武偵じゃなくて『特務武偵』だつての」

揚羽はそう言いつつ、弾切れのP90を横に落とし、腰のガジェットを右手で取り出す。

遙もそれに習い、両手の弾が切れたG11を放棄、手首のスナップで配布を取り出す。

遙が左手のナイフを振るいながら手を離して投合。遙を軸としての遠心力勢いの増したナイフは狙い通り隠れている一人の首に突き刺さる。

揚羽がガジェットの照準を壁の頭がある辺りに合わせトリガーを引く。

カアアン

銃声とは根本から違う音。

普通より大きい、小さい等の話しではなく、爆発音ではない。そして、柱に当たった弾も普通ではない。

柱には銃痕など存在していなかった。ただ　　一本の杭が撃ちこまれていた。

ガジェットとは、揚羽が自作で作り上げた銃型ネイルガン。

ネイルガンとは、木などに杭を打ち込む機械で、木工機器だ。

それを小型化、反動軽減、威力増加等の改造を施したのがガジェット。

正式名称、銃型杭撃ち機。

命中率や威力、射程を伸ばす為に銃身を長く。

反動を減らし、装弾数を増やし、消音効果を高める為口径は小さく作られている。

荒榎専用チューニングされ、使う事が出来るのは今のところ荒榎のみの銃。

弾が杭な為殺傷能力が高く、普通の武偵は所持しないだろう武器だが、特務武偵には丁度良い。

荒榎が引き金を引く度に柱に杭が撃ちこまれ、破片が飛び散る。

「……………ああもう、面倒だ」

そう言って、手に意識を向け電流を発生させる。

「……………ナニヲしている！」

「良い事を教えてやる。電気が飛ぶのは一直線。雷も抵抗が無ければ一直線に落ちる。だったら　　抵抗を別のもので補ったらどうなるだろうな」

「一体何の話しを　　」

ガアアアン

削岩機。それを思わせる音と共に煙が立つ。

敵の声はもう聞こえない柱の向こうから赤い液体が流れてくる。掠った、等の量ではなく抉ったと呼べる量。

柱は半壊　なんて事は無く。破損は今まで撃った杭、それと中心辺りに開いている穴一つのみ。

鉄杭は重く、故にどれだけの力を加えようと徐々に速度が落ち威力が下がる。

それは空気抵抗であり、重力であり、加速切れでもある。

しかし、そこに過剰な電力を加えてみたらどうだろうか？

電磁砲と呼ばれる程の電力では無くとも、電力を加える事で、より直線的な射線が生まれる。

電気が直線的に動こうとする事を利用し、鉄杭の空気抵抗で変わる分の射線を少しでも修正し、荷電により射撃時の威力を高め、射程や速度を向上させる。

空気抵抗は電力付加による鉄杭の威力向上で約28%低下。

重力により低下は電気の直線的動きにより5%減。

加速は電力による発射時加速と発射後の帯電により35%上昇。

つまり　　柱程度は壊さずに貫通する事が出来る。

「んじゃ、武偵会わないうちに帰るか」

「うん。早く帰って荷解きしないと」

「ってか。部屋番知らねえや」

「えっとね。男子寮の第三寮だつて」

「へえ〜」

「……聞いておいての態度じゃないよね」

「いや、別に聞いても分からないし」

「地図くらい見てよ……」

「面倒の一言で終わる」

「……ついでに、私も一緒だから」

「へえ」

「そこまで無関心！？いや、女の事一緒に部屋だよ？同じお湯に入るんだよ？」

「シャワーにすれば良いし。寧ろ、それに反応するだけでも？」

「……反応されたら、それはそれで困るかも」

「ってか、昔から一緒に部屋だったわけだし」

「それはそうだけど……新しい場所で新しい生活だよ？もうちょっと、こっ……」

「あれですか？キャツキャウフフとすると？」

「揚羽がそれをやったら私は引く」

「安心しろ、俺も引く」

第五話

『変態っ！死ねっ！』

『ちよ、アリア危ないっ！』

「……………遙」

「うん、分かっているから言わないで」

「ここって男子寮だよな？」

「言わないでって言ったじゃん！」

五月蠅い……………五月蠅過ぎる。男子寮に女子の声が響いてるとかどんな状況だよ。

しかも喧嘩……………防音の寮では無いとしても響き難い筈なのに……………。

感覚からして隣の部屋、ってか　アリア？

「……………対象1の名前って」

「神崎・H・アリアだから……………合ってると思う」

「よし、殺しに行こう」

「いや駄目だよ！他の人も居るんだから！」

「何で殺害対象の所為で苛つかないといけないんだよ！」

「対象1は殺害じゃなくて監視もしくは捕縛、または交渉対象だからね？ここで殺すと面倒な事になるよ？詳しく言つと皆から恨まれるよ？」

『第一、俺は変態じゃない！ただ、武器をだな』

『下着を取っておいて変態じゃない訳無いじゃないっ！風穴開けてやるっ！』

『だから落ち着け！そんなに暴れるとタオルが』

「……………せめて防音マットか何か用意しようぜ」

「それは賛成……………見せびらかされてる気分だし」

「何がだよ。ってか……貴族が同衾かよ」
「せめて同棲って言ってあげようよ……」
「もしくは居候……ではないか、金は有りそうだし」
「まあ、隣に監視対象がいるって便利だし。良いんじゃない？」
「俺達がバレなければな……」
「……………監視なんてやったことないよね」

揚羽、遙の二人コンビは色々な国で活躍しているが、それは裏の場
合。

探偵なんてやった事が無いし、監視なんて出来る訳が無い。
一体何に気を付けければ良いのか知らないし、一日や三日で身につく
ものではないだろう。

裏に監視が無い訳ではないし、監視を主とする特務武偵もいるが、
そういった人は暗殺を好む。

それは、ばれない為にも大きな武器は持てない事や、一般人とまぎ
れる為、体もあまり鍛えていないからだ。

武術の為に体を鍛え、戦闘の為の足運びを習うものは皆、普段通り
に生活していても一般人とは違う動きをする。

それはとても小さな違いだが、腕の立つ殺し屋や、マフィア等の裏
家業では判断できる人も少なくない。

その為に体を鍛えず、自然な動きによって相手を尾行し、力の要ら
ない方法、例えば薬等によって暗殺するのが特務武偵の尾行者だ。

しかし、揚羽と遙は武術とは違っていても、体を鍛え、戦闘用に作
り上げている。

武器もしっかりしており、アサルトライフルからスナイパーライフ
ル等の武器まで使う事がある。

はつきり言えば、二人は戦闘特化なのだ。尾行を諦め、戦闘に特化
する。

それだからこそ、様々な国に呼ばれるほどの戦闘力、色々な場所で
戦える思考判断を持つことが出来たのだ。

武偵高の様に、役立つ事を教える。ではなく、一つの事のみを伸ばした形なのだ。

殺しと近い捕縛、逮捕ならまだしも監視は無理なのだ。

「とまあ、色々と説明して見たり」

「うん、合ってる。合ってるけど目線の先にあるのは壁だよ?」

「監視……だと尾行も入るよな」

「余計に無理だよな……」

「よし、話しに行つて来る」

「……え、話?」

別に特務武偵として関わる必要は無い。ただ五月蠅い事を注意すれば良いんだから……。

ピンポンと適当にチャイムを押す。

『今見たでしょ!絶対見たっ!殺すっ!風穴開けてやる!』

『今のはお前が動いたからだろ!それと部屋の中で刀を降りまわすな!』

「……………」

もう一回鳴らす　ピンポン。

『あんたが服を荒らしたのが原因じゃない!この変態っ!』

『だから何度も言ってるだろ!俺はお前の下着じゃなくて

「……………」

ピンポンピンポンピンポンピンポンピンポンピンポンピンポンピンポン。

『五月蠅いわね!今忙しいのよ!』

「……………よし壊すか」
「いや駄目だからね？」

ポツリと呟いた言葉に反応したのは何時の間にか揚羽の隣にいた遙。何時になっても消えない声……………いや、騒音は今でも鳴り響いている。というか……………五月蠅いって言ったよな？

「普通はここで出てきて謝る所だよな？それを五月蠅いって言うって事はだ……………壊しても怒られないよな？」

「いや駄目だよ。大家さんが怒るから……………」

「家の中で刀振り回してれば変わんないだろ……………」

扉の修理が大変かどうかは知らないけど……………いや大変だろうけど。まあ、そんな事は知ったこっちゃない。壊す為に右足を持ち上げ、力を入れて

「……………悪い、何か用だったか」

「……………いや、うん。まあ？」

「……………大丈夫？」

出てきたのは朝の爆弾自転車……………なのだが、服が破けていたりと傷だらけ。

どこの戦争地帯に行つて来たんだと訊きたくなる格好を前にして五月蠅いとは言えない二人。

「ああ、問題無い。えっと……………揚羽と遙、だっけ？」

「うん、今日から隣の部屋に住む事になったから、ご挨拶に来ました」

「……………ああ、揚羽が」

「それと私も」

「……………」

そんな言葉に困惑を隠せない遠山。

男子寮に女子が住むと公言しているのだ、それも当然の事だろう。

これで揚羽が否定すれば笑いで終わるのだろうが、生憎揚羽には否定する理由が無い。

寧ろ、今まで一緒に部屋だった揚羽としては、それが普通になっているのだ。

それでも男子寮に女子がいる事について突っ込んでいる辺り、揚羽の遙に対する気持ちが伺える。

もともと、その所為で遙は微妙な心境になっているのだが…それは今は関係の無い事。

「……………えっと……………付き合ってるの?」

「え、あ、いや、あの、えっと、付き合ってるんじゃないかと訊かれれば付き合って無いんだけど、付き合っていないのかと訊かれるとそれはまた答え難い状況で、付き合ってるか付き合っていないかと言えばどちらかというと付き合ってるに近い状況なんだけどでも付き合っている関係ではないし付き合おう何て話も無かったしいや言おうと葉思った事ならあるんだけど言え無かったっていうか」

「付き合っていない」

「うん。付き合っていないよ……………」

「……………」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5707v/>

緋弾のエリアの人類欠落者

2011年10月12日15時49分発行